

「日本と北欧との歴史的接点を考える…

『日本史概説』のコラム執筆に寄せて」

石野 裕子

はじめに

二〇二〇年六月に考古・日本史学コースの専任教員全員で執筆した『日本史概説』^①が刊行された。筆者は考古・日本史学コースに所属しているが西洋史担当の教員であり、北欧史、特にフィンランド史を専門としている。それゆえ、筆者は外国と日本の接点を意識して補論「冷戦と日本」、コラム四本およびおすすめの史料館二館を執筆した。

筆者が専門としている北欧史は、高校までの世界史の範囲ではあまり学ぶ機会がない歴史である。古谷（二〇一三）によると、高校の世界史教科書では北欧史に関する記述は「中世におけるノルマン人の活動、デンマーク王を盟主として形成されたカルマル連合、三十年戦争へのスウェーデンへの参戦、北方戦争でのスウェーデンの敗戦」^②である。筆者が調べた限りでは古谷の指摘する箇所に加えて、デンマーク王国、ノルウェー王国とスウェーデン王国のルター派への改宗、第一次世界大戦後に独立した国の一国としてのフィンランド、第二次世界大

戦期に勃発したソ連とフィンランドの戦争に関して若干の記述が見られるが、北欧が中心となる記述ではない。加えて、教科書に掲載されているヨーロッパの地図ではスカンジナビア半島やフィンランドは大抵見切れており、ヨーロッパ史の大きな流れの中で補足的に北欧の情勢が説明されるに過ぎない。このような北欧の「扱い」は、西洋史の大きな流れの中で北欧がその中心となる時期や出来事が少ないという理由ゆえであると理解している。筆者が担当する大半の西洋史の授業では北欧を取り上げることが稀であり、北欧史に言及する時は工夫が必要である。⁽⁴⁾世界史、ヨーロッパ史を大学で講義する際取り上げられることが少ないからこそ、「辺境」に位置する北欧の歴史に注目することでヨーロッパの歴史の流れを別の視点から考察することができないかという気持ちが年々大きくなってきている。

筆者の専門とヨーロッパ史、世界史と「学び」の乖離がある現状で、北欧史とさらに「遠い」日本史とどのような接点を見出すことができるだろうか。本稿では前掲書のコラムで取り上げた二つのテーマをもとに、西洋と日本の接点、さらには北欧と日本の接点について補足することで、さらなる「学び」の視点を提供したい。

一 コラム四―二「漂流民とロシア」⁽⁵⁾から見る北欧と日本の接点

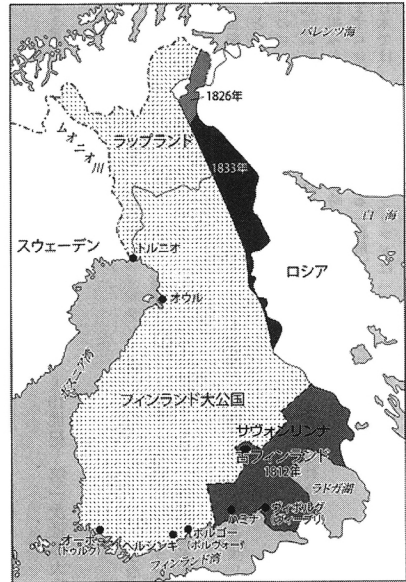
本コラムでは江戸時代に漂流民となった船頭の大黒屋光太夫（一七五一―一八二八）を取り上げた。ここでは鎖国政策下、漂流という偶発的な出来事によって日本人がロシアに渡り、滞在した後、帰国を果たした史実を外交関係や交易などを通じた経済交流ではない外国との交流の事例として取り上げた。この史実は偶発的に起こった点と点との交流の事例である一方で、その交流には個人的交流を超えた背景が存在した。

たキリル（エリク）・ラクスマン（ロシア語表記：Кирилл (Эрик) Луставович Лаксман、スウェーデン語表記：Kirill (Erik) Laksman, 一七三七～九六）という博物学者に出会う。帰国したいとの願いを光太夫から聞いたラクスマンはペテルブルクまで光太夫を連れていき、エカチェリーナ二世に謁見させることに成功する。エカチェリーナ二世から帰国許可がでて、光太夫は二名の仲間とともに、漂流から九年半後の一七九二（寛政四）年に根室の地を踏んだという史実は高校教科書にも掲載されている。⁽¹⁰⁾

大黒屋光太夫らの帰国に尽力したキリル（エリク）・ラクスマンはしばしばフィンランド人と書かれることがあるが、正確にはスウェーデン領フィンランド出身であり、ロシアで活躍した博物学者でロシア科学アカデミーの会員にもなった人物である。なぜこのような書き方をするかというとキリルが生まれた一七三七年の時点では、フィンランドはスウェーデン領であったが、彼の出身地であるサヴォンリンナ（スウェーデン語名はニュースロット）は一七四三年にロシアに占領され、ロシア領となったからである。この時にサヴォンリンナを含むロシア領となったフィンランド南東部は「古フィンランド（Vanha Suomi）」と呼ばれた。一八〇八年に勃発したスウェーデンとロシア間の戦争の講和条約が一八〇九年に締結されたことによりフィンランドはロシア領となり、「フィンランド大公国」となった。一八二二年にロシア帝国はこの「古フィンランド」をフィンランドに「返還」し、この地域を含めた領土がフィンランド大公国として一九一七年二月六日の独立宣言まで継続することになる。

第一次世界大戦、ロシア革命の余波を受けて、フィンランドは「古フィンランド」を内包した領域で独立を果たすが、第二次世界大戦期に勃発した対ソ戦争（冬戦争一九三九～四〇年、継続戦争一九四一～四四年）で敗戦した結果、「古フィンランド」の主要都市ヴィボルグ（ヴィープリ）を含むカレリア地峡はソ連に割譲された。⁽¹¹⁾ただし、サヴォンリンナはフィンランドに留まった。

フィンランド大公国の領域の変容 (1809～1917年)



図二 フィンランド大公国時代の地図

出典：拙著『物語 フィンランドの歴史―「バルト海の乙女」の八〇〇年』(中公新書、二〇一八年)、五四頁に加筆。

キリル(エリク)・ラクスマンは以上のようにスウェーデン領からロシア領に移った地域出身で、かつロシア帝国で活躍した人物であったので正確を期すと「スウェーデン領フィンランド出身」という表記になる。ただし、彼を「フィンランド人」として、大黒屋光太夫との接点を日本フィンランドの交流史の一環とみなす動きが見られる。

二〇一九年は日本フィンランド外交関係樹

立一〇〇周年にあたり、記念イベントがフィ

ンランド・日本両国で催された。三重県鈴鹿市の大黒屋光太夫記念館でも令和元年秋季企画展「光太夫とふたりのラクスマン―日本・フィンランド関係のあけぼの―」が開催された。そのパンフレットにはラクスマンはフィンランド出身(Finnish-born)と英語で記述されているものの、日本語訳では「フィンランド人」として記述されている^⑫。また同年に刊行された『日本とフィンランドの出会いとつながり―一〇〇年にわたる関係史―』の序章「ラクスマン親子の物語」でも、「日本人と広く交流を持った最初のフィンランド人は、サヴォリンナ出身の自然科学者・鉱物学者のエリク・ラクスマンだった」と表記されている^⑬。

一方、キリル(エリク)の次男であるアダム・ラクスマン(ロシア語表記: Адам Яковлевич, ラテン語表記: Adam Laksman 一七六六―没年は不明、九六以降に死去と推測される)はロシア生まれのロシア人と

言つて差し支えない。陸軍将校であつたアダムはエカチェリーナ二世の命を受けて遣日使節として、大黒屋光太夫ら三名の漂流民に同行し、一七九二（寛政四）年九月、根室に到着した。この遣日使節の目的は彼らの送還と日本との通商であつた。松前藩の城下町である松前で江戸幕府目付石川忠房と会見したが、交渉は実を結ぶ事はなかつた。アダムは長崎への入港許可証を手にしたものの、長崎には寄らず一七九三（寛政五）年七月に出立し、ロシアに戻つた。

以上のように交渉は失敗し、ロシアと日本の経済的交流は果たせなかつたものの、大黒屋光太夫と磯吉は江戸に渡り、ロシア滞在中の情報を伝える役割を果たした。杉田玄白らと翻訳した『解体新書』（一七七四（安永三）年）で知られる蘭学者の桂川甫周が編纂した『北槎聞略』（一七九四（寛政六）年）は大黒屋光太夫のロシアでの見聞が記録されたもので、政府にとって貴重な情報源となつた⁽¹⁴⁾。また、来日中のアダム・ラクスマンらが日本人に与えた影響もあつた⁽¹⁵⁾。エカチェリーナ二世はラクスマンら使節団の成果に満足し、二年後に新たな使節団の派遣を計画していたが、一七九六年にエリク・ラクスマンおよびエカチェリーナ二世が亡くなつたために実行されることはなかつた⁽¹⁶⁾という。

以上のような両国の交流に「フィンランド」は直接関わっていないものの、スウェーデン領であり、後にロシア領となつたサヴォンリンナ（現フィンランド地域）出身のキリル（エリク）・ラクスマンとその息子アダム・ラクスマンの二人のラクスマンとの出会いが、大黒屋光太夫の帰国を実現させた。偶発的な交流、すなわち点と点との交流が後の大きな交流につながつた事例として考察することができるだろう。

二 コラム五―「一八六七年のパリ万博と日本」⁽¹⁷⁾

本コラムでは一八六七年四月から開催されたパリ万国博覧会、通称「万博」に「日本」が初めて正式に参加した出来事を取り上げた。本コラムでは以下の二点を意識して執筆した。一点目は同年一月には大政奉還がなされるという幕末期に、パリ万博に参加した「日本」の実態について言及した点である。江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩、そして一般の商人が参加するなかで、薩摩藩があたかも独立国のように幕府とは別に出品したことが問題となった、すなわち、海外の文化外交の場において国内の対立が露わになった点を寺本敬子の研究（二〇一七）を基に記述した。⁽¹⁸⁾ 二点目は、このパリ万博がジャポネズリー、さらにはジャポニスム流行の大きなきっかけのひとつとなった点を述べた。⁽¹⁹⁾

ヨーロッパにおける日本美術への関心は日本美術品が展示されたパリ万博以前、すなわち開国以前から一部のヨーロッパ人の間で共有されていた。特に陶磁器や漆器は輸出品の花形であり、ジャポニスムの「火付け役」となった浮世絵は「後発」であった。一八五三年のペリー来航を契機に開国した日本に來日したイギリスやフランスの外交官、美術収集家らによって日本美術工芸品がヨーロッパに流出していったことが契機となった。⁽²⁰⁾

日本の美術工芸品、とりわけ浮世絵はモネ、ゴッホ、マネなどヨーロッパの芸術家たちを魅了し、彼らの作品に大きな影響を及ぼしたことは知られている。このような日本美術の流行、すなわちジャポニスムの波は北欧にまで達した。ジャポニスムが北欧で広く流行した一九世紀後半、北欧の芸術家たちへの影響がどのようなものであったかについて、二〇一六年に出版された展覧会の図録でもあり研究論文集でもある *Japano Mania in the Nordic*

Countries 1875-1918⁽²¹⁾を参考に、日本美術の北欧への影響とつながりについて補足し、文化交流の一例について「学び」の事例を提供したい⁽²²⁾。

北欧において日本美術が認識されるのはフランスなどヨーロッパ中央部よりは遅かったが、一八八〇年代に始まり、次第に広く愛好されるようになった。その過程には大きく分けて三種類の受容経路が見られる。

一つは、北欧の芸術家あるいは美術収集家がすでにジャポニスムが流行していたヨーロッパ諸国に滞在した時に展示会や店などで直接日本美術工芸品を目にし、その魅力を本国に伝えた事例である。一八八〇年代には北欧の芸術家らが、国から奨学金を受給してパリやウィーンなどに留学することが多々見られる。彼らは現地で最新のヨーロッパの美術の流行を目の当たりにする過程で、ジャポニスムにも触れたのである。そこで彼らは日本美術工芸品に魅せられた。例えば、フィンランドを代表する画家アクセリ・ガッレン＝カッレラ (Akeeli Gallen-Kallela 一八六五―一九三二) は、日本美術の愛好者として知られている⁽²³⁾。また、彼は一八八四年から八九年にかけて何度もパリに滞在しており、通っていた美術学校アカデミー・ジュリアンで浮世絵の技法を学んだという⁽²⁴⁾。後述するが、ガッレン＝カッレラのような芸術家は、後に浮世絵などに影響を受けた作品を生み出すことになる。ただし、ガッレン＝カッレラやノルウェーの画家エドヴァルド・ムンク (Edvard Munch 一八六三―一九四四) など一八八〇年代にパリに留学した北欧の芸術家は一八六〇年代からすでに起こっていたジャポニスムの流行を伝聞でしか知らなく、直接体験はしていない⁽²⁵⁾。

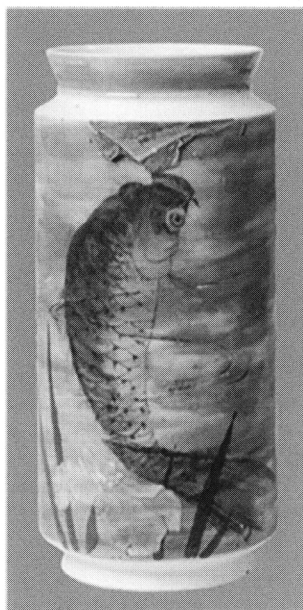
北欧の芸術家が留学先に選んだパリやウィーンでは、上述した万国博覧会が日本美術の普及に大きな影響を及ぼしていった。コラムで取り上げた一八六七年のパリ万博には明治維新直前の「日本」が参加したが、明治維新以降、新政府が万博に参加していく。一八七三年に開催されたウィーン万国博覧会に日本政府は海外の工業技術の習

得を目的に参加したが、現地では日本美術工芸品が展示され、好評を得た。⁽²⁶⁾ 一八七六年にアメリカのフィラデルフィアで開催された万博にもウィーンで好評だった陶磁器が展示、販売されるなど、海外での日本美術工芸品の評判は世界各地で高いものであった。このように海外において展示された日本美術工芸品が北欧の芸術家そして美術収集家の目に留まったことは不思議ではない。一八七〇年代にはパリだけではなく北欧の百貨店でも日本の陶磁器、着物、扇子などが入手可能になり、愛好家や芸術家たちはパリに行かなくても自宅もしくはアトリエを日本美術で装飾することができたらしいが、パリでの品揃えは北欧のよりも充実していただろう。

二つ目は日本美術にすでに影響を受けた海外の画家が北欧に滞在した際にその魅力を伝えた事例である。例えば、「ラ・ジャポネーズ」(一八七六年作)といった作品からジャポニスムに影響を受けたと知られているフランスの画家クロード・モネ(Claude Monet 一八四〇～一九二六)は、一八九五年二月から翌年の三月までに継子を訪ねてノルウェーに滞在した。そこで、モネは、富士山に似ているホルソース山(Moltes)を様々な角度から描写した。ウェイズバークによると、日本で葛飾北斎をはじめとして多くの画家が富士山を描いているのに影響を受けた故だ⁽²⁸⁾という。継子は公的なレセプションなどをしていないようにしたもの、モネは複数の新聞取材を受けるなど、この時期にすでに著名であったモネのノルウェー滞在が北欧に与えた影響は大きかった。⁽³⁰⁾

同じくジャポニスムの影響を受けたフランスの画家ポール・ゴーギャン(Paul Gauguin 一八四八～一九〇三)も北欧との繋がりがあった。彼の妻の家族がデンマークのコペンハーゲンに居住していたことから、コペンハーゲンのデザイナーのピエトロ・クローン(Pietro Krohn)と親交があった。クローンもまた日本美術の愛好家であった。⁽³¹⁾

三つ目は日本美術の展覧会が北欧で開催され、そこで日本美術工芸品に出会った事例である。一八七四年にヘル



図三 一八八五年に発表されたグ
ログの花瓶

出典：Gabriel P. Weisberg, "Connecting with Japan: the transmission" in Weisberg, Bonsdorff & Selkokari, *op.cit.*, p. 67.

シンキに開館した応用美術館には、中国美術工芸品とともに日本美術工芸品が展示された。一八八六年には、コペンハーゲンでカール・マッドセン (Karl Madsen) とデンマーク産業連合による日本及び中国応用美術の展示会が開催された⁽³²⁾。また、一八九七年九月にヘルシンキのウエンゼル・ヘーゲルスタム (Wenzel Hægelstam) のアート・ギャラリーでフィンランド初の公的な日本の浮世絵の展覧会が開催された。この展覧会はクリスチャニア (現オスロ) とストックホルムを巡回したもので、ヘルシンキは最後の巡回地であった。また展示された全ての絵が売り物だったので、最後の巡回地のヘルシンキでは展示する絵が少なくなった⁽³³⁾。それだけ浮世絵は北欧の人びとを魅了したものであったのだろう。

以上のように、複数の経路から日本美術工芸品が北欧に紹介され、その魅力にはまった芸術家たちの作品には日本美術の影響が見出される。例えば、陶磁器会社ロイヤル・コペンハーゲンのデザイナーであり、一八八四年からアート・ディレクターを務めたアーノルド・クロッグ (Arnold Krog 一八五六―一九三二) もその一人であった。彼は一八八七年に花を背とした水の中の鯉が底に描かれた花瓶を発表した。このような水の中の鯉や急流の中の

鯉、富士山などはジャポニスムの基本的なモチーフであった。彼の作品は一八八九年のパリ万博で展示され、好評を得た⁽³⁴⁾。このような一連のロイヤル・コペンハーゲンの成功は隣国スウェーデンの陶磁器会社ローストランドの改革を後押しした。一八八八年にコペンハーゲンで開催された展覧会の



図五 歌川国芳《耀武八景・石橋山秋月》
一八四三～四七年（天保一四年～弘化
四年）。

出典：Anna-Maria von Bonsdorf, "From Blade of Grass to Sacred Wilderness: Changing the Concept of Nature", in Weisberg, von Bonsdorff & Selkokari, *op. cit.*, p. 236.

北欧でナシヨナリズムが高揚した時期でもあった。一八〇九年からロシア統治下に置かれていたフィンランドでもナシヨナリズムが高揚し、その潮流は芸術運動カレリアニズムにつながって行った。カレリアニズムに大きな影響を及ぼしたのは、一八三五年に編纂、一八四九年に再編纂された『カレワラ (Kalevala)』であった。同書はフィンラ

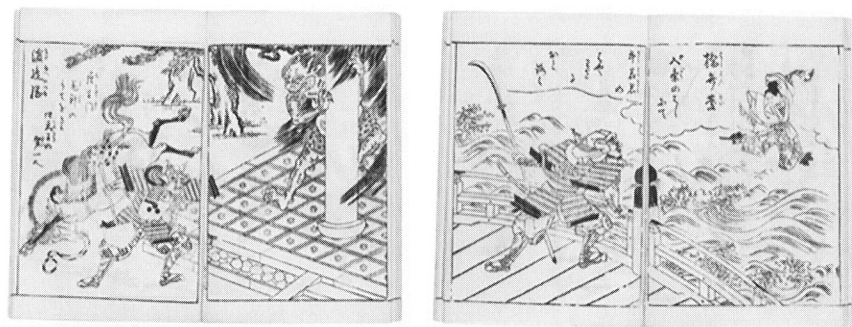


図四 アクセリ・ガッレラ=カレツラ《サンポの防衛》一八九六年。

出典：Gabriel P. Weisberg, "Connecting with Japan: the Transmission" in Weisberg, von Bonsdorff & Selkokari, *op. cit.*, p. 69.

ために雇われた画家アルフ・ワランダー (Alf Wallander 一八六二～一九一四) は日本美術に影響を受けた人物であったという。ローストランドはヨーロッパの一流の陶磁器会社と競合するまでに成長し、数々の日本美術に影響を受けた製品を発表していった。ワランダーの監督下でローストランドはヨーロッパ各地で開催された展覧会で評判を呼び、一九〇〇年のパリ万博でも国際的な名声を得た。³⁵⁾

荒屋鋪がすでに指摘しているように、ジャポニスムの流行がピークに達した時期は北欧絵画の黄金期と重なっており、また



図六 長谷川光信『倭繪英雄鏡』下巻、一七五一年（宝暦元年）。

出典：Gabriel P. Weisberg, "Connecting with Japan: the Transmission" in Weisberg, von Bonsdorff & Selkokari, *op. cit.*, p. 73.

出典では一七九〇年と記載されているが、同書は一七五一年に刊行されている。

ンド語の口承詩を文字化したものであり、ロシア統治以前の六〇〇年以上スウェーデンに統治された状況ゆえにスウェーデン語が公用語となっていたフィンランドでナシヨナリズムが興隆するなか、一八八〇年代にはフィンランド語を中心としたフィンランド・ナシヨナリズムの中心的存在になっていた。芸術運動カレリアニズムでは、芸術家たちがフィンランド民族文化「揺籃の地」、すなわち『カレワラ』の原詩を多く採集した地であるカレリア地方「詣で」を行い、インスピレーションを得て個々の芸術活動に昇華させた。ガッレン・カッセラもその一人であり、彼は一連の『カレワラ』絵画を描いていた。その中の一作品である《サンポの防衛》（一八九六年作）に描かれた波の表現は歌川国芳の浮世絵から、人物のポーズは長谷川光信の絵本から重要なインスピレーションを得たという研究がある。⁽³⁷⁾前述したように、ガッレン・ガッセラは日本美術のコレクターであり、長谷川光信の絵本コレクションなども保有していた。⁽³⁸⁾この《サンポの防衛》を含めた彼の『カレワラ』作品は一九〇〇年のパリ万博に設置された「フィンランド館」の壁にフレスコ画として描かれた。⁽³⁹⁾

同万博はフィンランドにとって重要な万博であった。フィンランドがロシア帝国統治下の「大公国」でありながらも独自の「フィンラン

ド館」というパビリオンを出展したからである。そこに、ジャポニスムの影響を受けたフィンランドのナショナル・イズムを表現した作品が披露されたのである。「フィンランド館」は評判が高く、フィンランド大公国の名をヨーロッパに知らしめたのであった。⁽⁴⁾

一方で、当時フランスではアール・ヌーヴォーが流行しており、パリ万博もその影響が展示美術作品に多く見られたという。⁽⁴⁾ 新たな美術の流行であるアール・ヌーヴォー様式の美術作品が多く展示される中で、同じくアール・ヌーヴォー様式の「フィンランド館」にジャポニスムの影響を受けたナショナル・イズム的な美術作品が展示され、訪れた人びとを魅了したのである。

おわりに

本稿では『日本史概説』で執筆した二本のコラムをもとに、日本とヨーロッパ、そして北欧の接点を指摘し、コラムに書くことができなかった「余白」について解説した。日本と北欧の歴史的接点は少ないが、ジャポニスムに見られるように間接的な交流を含めると様々な角度から語ることが可能であろう。また、今回は触れなかったが、ジャポニスムの前にヨーロッパで流行したシノワズリーとの関係に注目することで「異国趣味」から見た異文化交流、さらにはヨーロッパにおける日本文化の印象と現実との差異、今回取り上げた絵画や陶磁器以外の美術工芸品に見るジャポニスムの影響、美術工芸品の交易と人物交流など様々な交流を「学び」の事例として提供することができる。そのようなテーマの考察を通じて、日本と北欧の接点が重層的に見えてくるのではないだろうか。

二〇二二年に高校で「歴史総合」の授業が開始される予定である。「歴史総合」は、端的に言えば近現代を中心

に「日本史」と「世界史」を統合するものである。この「歴史総合」に関しては国家史を中心として組み立てられた点などが専門家から批判されているが、その一方で文部科学省から出された『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）』には、「歴史総合」の目標として「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」と書かれている。⁽⁴³⁾この要領からも高校教員を目指す学生に対して、日本と世界との接点を学ぶ機会を設けることはこれからますます重要になってくるだろう。⁽⁴⁵⁾

繰り返しになるが、筆者の研究対象とする北欧史は高校の世界史では取り上げられることはほとんどない。そして二〇二二年から始まる「歴史総合」の授業でも同様の扱いを受けるだろう。しかし、考古・日本史学コースに所属する教員として、これまで世界史の学習から抜け落ちていた北欧と日本との接点の「歴史」を考察することで、学生に新たな視座を提供できるのではないかと考える。特に今年度からゼミを受け持っていることもあり、日本史を学ぶ学生に日本史から世界とのつながりを考察する機会を提供できればと考える。本稿はその試みの一つである。

註

- (1) 勝田政治、眞保昌弘、仁藤智子、秋山哲雄、夏目琢史、久保田裕次、石野裕子『日本史概説―知る・出会う・考える』（北樹出版、二〇二〇年）。
- (2) 古谷大輔「研究フォーラム 日本史における北欧史研究の課題―『ミッシング・リンク』の探索による思考回復への挑戦」（『歴

史と地理」六六四号、山川出版社、二〇一三年五月）五八―五九頁。

(3) 参照した高校世界史の教科書は木村靖二、岸本美緒、小松久男編『詳説 世界史 改訂版』（山川出版社、二〇一八年）、三浦徹他著『新選 世界史B』（東京書籍、二〇一八年）、川北稔他著『新詳 世界史B』（帝国書院、二〇一八年）である。

(4) 北欧史を大学で教える際の取り組みについては二〇一八年一月二日に歴史コミュニケーション研究会において「外国史概説の課題・第一次世界大戦期の北欧史」と題して発表した。

(5) 前掲、勝田政治他『日本史概説―知る・出会う・考える』、二二〇頁。

(6) 『第十回特別展 漂流・漂着ものがたり―海へ往く者 海から来る者』（鈴鹿市・大黒屋光太夫記念館、二〇一四年一〇月）四頁。

(7) 同右、七頁。

(8) 同右、七頁。

(9) 生田美智子「漂流民がもたらした日露対話―伝兵衛から光太夫まで」東洋文庫・生田美智子監修、牧野元紀編『ロマノフ王朝時代の日露交流』（勉誠出版、二〇二〇年）六二頁。生田によると、ロシアに渡った日本人の物語は一六九五年に大阪を出航し、漂流民となった伝兵衛から始まることが多いが、現在では、漂流民がロシアに現れる約一〇〇年前に切支丹の日本人ニコラスがロシアに滞在したことが明らかになっているという。ただこのような宗教がらみのケースは単発的で、ロマノフ王朝時代のロシアに渡る日本人は、ほとんどが漂流民であったという。

(10) 前掲、木村靖二他『詳説 世界史 改訂版』、六一―七頁。なお、大黒屋光太夫の生涯に関しては、木崎良平『漂流民とロシア―北の黒船に揺れた幕末日本―』（中公新書、一九九一年）、山下恒夫『大黒屋光太夫―帝政ロシア漂流の物語―』（岩波新書、二〇〇四年）、生田美智子『大黒屋光太夫の接吻・異文化コミュニケーションと身体』（平凡社選書、一九九七年）を参照した。また、二〇一九年一月に三重県鈴鹿市の大黒屋光太夫記念館を訪問した際に学芸員の代田美里さんにいろいろご教示していただいた。

(11) 拙著『物語フィンランドの歴史―「バルト海の乙女」の八〇〇年』（中公新書、二〇一八年）一七七頁。

(12) 『大黒屋光太夫記念館令和元年度秋季企画展 光太夫とふたりのラクスマン―日本・フィンランド関係のあけぼの―』（鈴鹿市文化スポーツ部文化財課、二〇一九年一〇月）四頁。

- (13) オラヴィ・K・フェルト「ラクスマン 親子の物語」『日本とフィンランドの出会いとつながり——一〇〇年にわたる関係史——』(大学教育出版、二〇一九年) 一頁。
- (14) 木崎によると、ラクスマンの渡来と光太夫らの帰還は、日本におけるロシア研究、ひいてはヨーロッパ研究の発展に寄与したという。前掲、木崎良平『漂流民とロシア——北の黒船に揺れた幕末日本——』、七六—七七頁。また現在、『北槎聞略』は校訂版が岩波文庫から出版されている。亀井高孝校訂、桂川甫周著『北槎聞略』(岩波文庫、一九九〇年)。
- (15) 大黒屋光太夫記念館の図録によると、ラクスマンが日本滞在中と日本初のロシア語辞書が作成されたという。また、ラクスマンが持ち込んだ地図によって、日本は最新の世界地図を入手できたという。さらには紅茶やスケート、ヤギなどラクスマンが日本に持ち込んだ者は人びとの注目を集め、その場に立ち会った人物によって描かれ、転写を繰り返して全国へと広まっていったという。『北の黒船ラクスマン 来航 光太夫帰国二二〇周年』(鈴鹿市、二〇一二年) 一四頁。
- (16) 前掲、オラヴィ・K・フェルト「ラクスマン 親子の物語」『日本とフィンランドの出会いとつながり——一〇〇年にわたる関係史——』、三—四頁。
- (17) 前掲、勝田政治他『日本史概説——知る・出会う・考える』、一三五頁。
- (18) 寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』(思文閣出版、二〇一七年)。
- (19) ジャポニスム学会によると、ジャポネズリーとジャポニスムの違いを『ジャポニスム入門』で以下のように定義する。『「ジャポネズリー」とは、明らかにそれとわかる日本的な主題やモチーフを、その主題やモチーフに対する特別な好みから作品に利用した場合、その利用のしかたや作品そのものを暗示する用語で、つまり日本に対する特別な好みを主要な動機とする。(中略) それに対し、『ジャポニスム』の場合は『ジャポネズリー』をも含みながら、さらに広く、造形原理、構造様式、価値観をも視野に入れて、日本とはまったく関係のない主題を扱った作品にも日本との関連、あるいは日本の影響を跡付け、その意味を探ることになる。』ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』(思文閣出版、二〇〇〇年) 五一—六頁。他方、『ジャポネズリー』の用語は当時、その意味で使われることは稀であるという指摘もある。宮崎克己『ジャポニスム——流行としての「日本」』(講談社現代新書、二〇一八年) 二二頁。本稿では両者の区別を厳密にせずに、「ジャポニスム」を日本趣味の流行という意味で使用する。
- (20) 小林利延「日本美術の海外流出——ジャポニスムの種子はどのように蒔かれたのか——」前掲、『ジャポニスム入門』、一三—二五

頁。

- (21) Weisberg, Gabriel P., Anna-Maria von Bonsdorff & Hanne Selkoki, *Japano Mania in the Nordic Countries 1875-1918* (New Haven and London: Yale University Press, 2016). 同書は二〇一六年にフィンランドのアテネウム美術館「ノルウェーの国立美術・建築・デザイン美術館」二〇一七年にデンマークのコペンハーゲン美術館において巡回展にあわせて出版された。なお、本稿では北欧のジャポニスムの一部しか言及していないが、同書では絵画や陶磁器だけではなく、織物やポストカードといった様々なジャンルのジャポニスムについての論考や北欧における日本美術のコレクションについての論考などが収録されており、北欧におけるジャポニスムについて包括的に学べる内容となっている。なお、この巡回展報告が日本語で書かれている。杉山菜穂子『「北欧諸国におけるジャポノマニア 一八七五—一九一八 (Japanomania in the Nordic countries 1875-1918)」展に關して』『ジャポニスム研究』(ジャポニスム研究会、三六号、二〇一六年三月)、四五—五三頁。
- (22) 北欧のジャポニスムに関する日本語論文は、荒屋鋪透「画家ガッレン＝カッレラとフィンランド美術のジャポニスム—一八九〇年代の北欧のナショナル・ロマンティズムをめぐって—」『ジャポニスム学会、一九九〇—一九九九年八月』、一九—三五頁、荒屋鋪透「北欧—スウェーデン、フィンランドを中心に—」前掲、『ジャポニスム入門』、一六一—一六九頁、人見伸子「フィンランドにおける二つのジャポニスム—ガッレン＝カッレラとアルヴァ・アアルト—」『成蹊大学文学部紀要』(成蹊大学文学部部会、二〇二〇年三月) 六九—八二頁などがある。
- (23) Gabriel P. Weisberg, "Connecting with Japan: the Transmission in Weisberg, von Bonsdorff & Selkoki, *op. cit.*, p. 73.
- (24) *Ibid.*
- (25) 前掲、杉山菜穂子『「北欧諸国におけるジャポノマニア 一八七五—一九一八 (Japanomania in the Nordic countries 1875-1918)」展に關して』、四七頁。なお、ガッレン＝カッレラはムンクと友人関係にあり、ベルリンで一八九五年に共同展覧会を開催した仲であった。このように同時期の北欧の画家のつながりも見出せる。ただし、両者の代表作が展示されたにもかかわらず、この共同展覧会は不成功に終わったという。前掲、荒屋鋪透「画家ガッレン＝カッレラとフィンランド美術のジャポニスム—一八九〇年代の北欧のナショナル・ロマンティズムをめぐって—」、一九—二二頁。
- (26) Gabriel P. Weisberg, "The Japonisme Phenomenon in Weisberg, von Bonsdorff & Selkoki, *op. cit.*, p. 25. ウィーン万国博覧会と日本との関わりについての詳細は、藤原隆男『明治前期日本の技術伝習と移転—ウィーン万国博覧会の研究—』(丸善プラネット、

二〇一六年)を参照。

- (27) 同右、一九頁。
- (28) 前掲、杉山菜穂子「『北欧諸国におけるジャポノマニア 一八七五―一九一八 (Japanomania in the Nordic countries 1875-1918)』展に關して」四六頁。
- (29) Weisberg, "The Japonisme Phenomenon" in *Ibid.*, pp. 28-29.
- (30) *Ibid.*, p. 29.
- (31) *Ibid.*, p. 31.
- (32) 北欧における日本美術の展示に關しては Widar Halén, "The First Collections of Japanese Art in Nordic Countries" in *Ibid.*, pp. 76-84 および Leila Koivunen, "From Japan to Finland: Growing Collections" in *Ibid.*, pp. 85-91 を参照。
- (33) Leila Koivunen, "Japanese Woodcuts in Finnish Exhibitions and Collections" in *Ibid.*, pp. 133-135.
- (34) Gabriel P. Weisberg, "Connecting with Japan: the transmission" in *Ibid.*, pp. 64-65.
- (35) *Ibid.*, p. 65.
- (36) 前掲、荒屋鋪透「北欧―スウェーデン、フィンランドを中心に―」一六一頁。
- (37) 〃の指摘は複数の研究でなされている。例えば Anna-Maria von Bonsdorff "From Blade of Grass to Sacred Wilderness: Changing the Concept of Nature" in Weisberg, von Bonsdorff & Selkokari, *op. cit.*, pp. 235-236.
- (38) Weisberg, "Connecting with Japan: the Transmission" in *Ibid.*, pp. 72-73.
- (39) *Ibid.*
- (40) フィンランド館で描かれた同じ『カレワラ』をテーマとしたフレスコ画が一九二八年にフィンランド国立博物館のエントランスホールの丸天井に描かれ、現在でも見ることができる。同様の指摘が前掲、人見伸子「フィンランドにおける二つのジャポニスム―ガッレン・カッレラとアルヴァ・アアルト」七三頁になされている。
- (41) フィンランド館についての日本語論文は本橋弥生「一九〇〇年パリ万博におけるフィンランド館についての一考察―ナショナル・アイデンティティの創造」『鹿島美術財団年報』二三号(鹿島美術財団、二〇〇四年)、二〇二―二二三頁がある。
- (42) 吉田典子「一九〇〇年パリ万国博覧会―政治・文化・表象―」『国際文化学』(神戸大学国際文化学会、第三号、二〇〇〇年三

月)、一六一―一九頁。宮崎は、アールヌーヴォーとジャポニスムの関係について言及している。宮崎によると、ジャポニスムはアールヌーヴォーという「新様式誕生のための最後の、決定的な要因だったが、それもやがてこれに溶け込んで表面的には見えにくくなっていった」という。宮崎克己「フランス・一八九〇年代以降―装飾の時代」前掲、ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』、六三―六四頁。

- (43) 例えば、岩井淳「世界史の視点から考える『歴史総合』―『日本史』『世界史』の統合と国家史の相対化」『学術の動向』二四卷一―号(日本学術協力財団、二〇一九年)、五〇―五二頁。なお、北欧史の分野では「バルト・スカンディナヴィア」という概念が長らく提唱され、一国史で語ることができない北欧地域の歴史を包括的に考察しようという試みがなされてきた。前掲、古谷大輔「研究フォーラム 日本史における北欧史研究の課題―『ミッシング・リンク』の探索による思考回復への挑戦」、六二頁。筆者が所属する「バルト・スカンジンヴィア研究会」はそのような趣旨で運営されている研究会である。

- (44) 『高等学校学習指導要領(平成三〇年告示)』(文部科学省ホームページ: https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf 最終閲覧日 二〇二〇年一〇月二八日)、五六頁。

- (45) ジャポニスムを「歴史総合」に生かそうとする提案はすでに東田によってなされている。東田雅博『ジャポニスムと近代の日本』(山川出版社、二〇一七年)、九一―一〇〇頁。